少年少女日本文学館 28

吾輩は猫である

わがはい　ねこ

wagahaiwa nekode aru

下

夏目漱石

なつめそうせき

natsume sōseki

913

夏目漱石

少年少女日本文学館 28

吾輩は猫である(下)

講談社 1988

348p 23cm

内容：吾輩は猫である(下)

なつめ そうせき

少年少女日本文学館 第二十八巻 吾輩は猫である(下)

定価はカバーに表示してあります

昭和六十三年三月二十一日 第一刷発行

著者……夏目漱石
発行者……加藤勝久
発行所……株式会社 講談社
東京都文京区音羽二-十二-二十一
郵便番号 一一二
電話 東京(〇三)九四五-一一一一(大代表)

印刷所……株式会社廣済堂
製本所……黒柳製本株式会社

©講談社 昭和六十三年
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。なお、この本についてのお問い合わせは、児童局児童企画あてにお願いいたします。

Printed in Japan
ISBN4-06-188278-3 (0) (児企)

もくじ

夏目漱石

吾輩は猫である（下）

八……7
九……72
十……135
十一……218

解説——小田切進……332
随筆——〝猫〟と私——井上靖……339
夏目漱石 略年譜……346

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

◆この本の本文表記について

●現代かなづかい、現代送りがなを使用した。

●極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損なうおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。

●本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合は左側にルビをそえた。

●さらに説明を必要とする語句や事項には、＊をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

●改行のない文中にある会話部分を、読みやすいように、改行したところもあります。

吾輩(わがはい)は猫(ねこ)である（下）

さし絵／赤坂三好

八

垣巡りという運動を説明した時に、主人の庭を結い繞らしてある竹垣のことをちょっと述べたつもりであるが、この竹垣の外がすぐ隣家、すなわち南隣の次郎ちゃんとこと思っては誤解である。家賃は安いがそこは苦沙弥先生である。与っちゃんや次郎ちゃんなどと号する、いわゆるちゃん付きの連中と、薄っ片な垣一重を隔ててお隣同志の親密なる交際は結んでおらぬ。この垣の外は五、六間の空き地であって、その尽くる所に檜がこんもりと五、六本併んでいる。椽側から拝見すると、向こうは茂った森で、ここに住む先生は野中の一軒家に、無名の猫を友にして日月を送る江湖の処士であるかのごとき感がある。ただし檜の枝は吹聴するごとく密生しておらんので、その間から群鶴館という、名前だけ立派な安下宿の安屋根が遠慮なく見えるから、しかく先生を想像するのにはよほど骨の折れるのはむろんである。しかしこの下宿が群鶴館なら先生の居はたしかに臥龍窟ぐらいな価値はある。名前に税はかからんからお互いにえらそうな奴を勝手次第に

（二間は約一・八メートル）
（民間にあって、役所や政府に仕えない人）
（縁側）
（人にいいふらす）
（そのように）

付けることとして、この幅五、六間の空き地が竹垣を添うて東西に走ること約十間、それから、たちまち鉤の手に屈曲して、臥龍窟の北面を取り囲んでいる。この北面が騒動の種である。本来なら空き地を行き尽くしてまたあき地、とか何とか威張ってもいいくらいに家の二側を包んでいるのだが、臥龍窟の主人はむろん窟内の霊猫たる吾輩すらこのあき地には手こずっている。南側に檜が幅を利かしているごとく、北側には桐の木が七、八本行列している。もう周囲一尺ぐらいにのびているから下駄屋さえ連れてくればいい価になるんだが、借家の悲しさには、いくら気が付いても実行はできん。主人に対しても気の毒である。せんだって学校の小使が来て枝を一本切って行ったが、そのつぎに来た時は新しい桐の 俎下駄(男子用の大きな下駄)を穿いて、この間の枝でこしらえましたと、聞きもせんのに吹聴していた。ずるい奴だ。桐はあるが吾輩及び主人家族にとっては一文にもならない桐である。*玉を抱いて罪ありという古語があるそうだが、これは桐を生やして銭なしといってもしかるべきもので、いわゆる宝の持ち腐れである。(役に立つものを持ちながら利用しないこと)愚なるものは主人にあらず、吾輩にあらず、家主の伝兵衛である。いないかな、いないかな、下駄屋はいないかなと桐の方で催促しているのに知らん面をして屋賃(家賃)ばかり取り立てにくる。吾輩は別に伝兵衛に恨みもないから彼の悪口をこのくらいにして、本題に戻ってこの空き地が騒動の種であるという珍譚(珍しい話)を紹介仕る

玉を抱いて罪あり
身分の低い者、志の低い者は、持ちつけない財宝などを持つとかく罪をおかしたり、わざわいをまねいたりするものだ、ということ。中国戦国時代の「春秋左氏伝」にあることば。

乱杭
敵の侵入を防ぐためのしかけで、ふぞろいに杭を打ち込み、それになわを張りめぐらしたもの。

逆茂木
乱杭と同じく敵の侵入を防ぐもので、茨の枝をさかさにして結び合わせ、垣にしたもの。

梁上の君子（一〇ページ）
どろぼう。後漢の陳寔が天井の梁の上にひそんでいるどろぼうをこう呼んだという故事による。

が、けっして主人にいってはいけない。これ限りの話である。そもそもこの空き地に関して第一の不都合なることは垣根のないことである。吹き払い、吹き通し、抜け裏、通行御免天下晴れての空き地である。あるというと嘘をつくようでよろしくない。実をいうとあったのである。しかし話は過去へ溯らんと源因が分からない。源因が分からないと、医者でも処方に迷惑する。だからここへ引き越して来た当時からゆっくりと話し始める。吹き通しも夏はせいせいして心持ちがいいものだ、不用心だって金のない所に盗難のあるはずはない。だから主人の家に、あらゆる塀、垣、ないしは乱杭、逆茂木の類は全く不要である。

しかしながらこれは空き地の向こうに住居する人間もしくは動物の種類いかんに因って決せらるる問題であろうと思う。したがってこの問題を決するためには勢い向こう側に陣取っている君子の性質を明らかにせんければならん。人間だか動物だか分からない先に君

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

子と称するのははなはだ早計のようではあるがたいてい君子で間違いはない。梁上の君子など（九べー）といって泥棒さえ君子という世の中である。ただしこの場合における君子はけっして警察の厄介になるような君子ではない。警察の厄介にならない代わりに、数でこなしたものとみえて沢山いる。うじゃうじゃいる。落雲館と称する私立の中学校——八百の君子をいやが上に養成するために毎月弐円の月謝を徴集する学校である。名前が落雲館だから風流な君子ばかりかと思うと、それがそもそもの間違いになる。その信用すべからざることは群鶴館に鶴の下りざるごとく、臥龍窟に猫がいるようなものである。学士とか教師とか号するものに主人苦沙弥君のごとき気違いのあることを知った以上は落雲館の君子が風流漢（風流な人間）ばかりでないということがわかるわけだ。それがわからんと主張するならまず三日ばかり主人のうちへ宿まりに来てみるがいい。

前申すごとく、ここへ引き越しの当時は、例の空き地に垣がないので、落雲館の君子は車屋の黒のごとく、のそのそと桐畠に這入り込んできて、話をする、弁当を食う、笹の上に寝転ぶ（寝転ぶ）——いろいろのことをやったものだ。それからは弁当の死骸すなわち竹の皮、古新聞、あるいは古草履、古下駄、ふるという名のつくものを大概ここへ棄てたようだ。無頓着なる主人は存外平気に構えて、別段抗議を申し込まずに打ち過ぎたのは、知らなかったのか、知っても咎めんつもりであっ

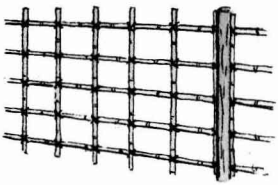
たのか分からない。ところが彼ら諸君子は学校で教育を受くるに従って、だんだん君子らしくなったものとみえて、次第に北側から南側の方面へ向けて蚕食を企ててきた。蚕食という語が君子に不似合いならやめてもよろしい。ただし外に言葉がないのである。彼らは水草を追うて居を変ずる沙漠の住民のごとく、桐の木を去って檜の方に進んで来た。檜のある所は座敷の正面である。よほど大胆なる君子でなければこれほどの行動は取れんはずである。一両日の後彼らの大胆はさらに一層の大を加えて大々胆となった。教育の結果ほど恐ろしいものはない。彼らは単に座敷の正面に逼るのみならず、この正面において歌をうたいだした。何という歌か忘れてしまったが、けっして三十一文字の類ではない、もっと活潑で、もっと俗耳に入り易い歌であった。驚いたのは主人ばかりではない、吾輩までも彼ら君子の才芸に嘆服して覚えず耳を傾けたくらいである。しかし読者も御案内であろうが、嘆服ということと邪魔ということは時として両立する場合がある。この両者がこの際図らずも合して一となったのは、今から考えてみても返す返す残念である。主人も残念であったろうが、やむをえず書斎から飛び出して行って、ここは君らの這入る所ではない、出たまえといって、二、三度追い出したようだ。ところが教育のある君子のことだから、こんなことでおとなしく聞くわけがない。追い出されればすぐ這入る。這入れば活潑なる歌をう

たう。高声に談話をする。しかも君子の談話だから一風違って、おめえだの知らねえのという。そんな言葉は御維新前は折助と雲助と三助の専門的知識に属していたそうだが、二十世紀になってから教育ある君子の学ぶ唯一の言語であるそうだ。一般から軽蔑せられたる運動が、かくのごとく今日歓迎せらるるようになったのと同一の現象だと説明した人がある。主人はまた書斎から飛び出してこの君子流の言葉にもっとも堪能なる一人を捉まえて、なぜここへ這入るかと詰問したら、君子はたちまち「おめえ、知らねえ」の上品な言葉を忘れて「ここは学校の植物園かと思いました」とすこぶる下品な言葉で答えた。主人は将来を戒めて放してやった。放してやるのは亀の子のようでおかしいが、実際彼は君子の袖を捉えて談判したのである。このくらいやかましくいったらもうよかろうと主人は思っていたそうだ。ところが実際は女媧氏の時代から予期と違うもので、主人はまた失敗した。今度は北側から邸内を横断して表門から抜ける、表門をがらりとあけるからお客かと思うと桐畠の方で笑う声がする。形勢はますます不穏である。教育の功果はいよいよ顕著になってくる。気の毒な主人はこいつは手に合わんと、それから書斎へ立て籠もって、恭しく一書を落雲館校長に奉って、少々お取り締まりをと哀願した。校長も鄭重なる返書を主人に送って、垣をするから待ってくれといった。しばらくすると、二、三人の職人が来て

雲助
江戸中期以後、宿場や街道などで駕籠をかついだり、交通労働にしたがった者。住所不定で無法な者が多かった。

女媧氏
中国古代の神話的女性で、人類の始祖ともされる。頭は人間で、体は大蛇といわれる。それほど大昔のこと。

四つ目垣
竹をあらく縦横に、目が正方形になるように組んだ垣根。



半日ばかりの間に主人の屋敷と、落雲館の境に、高さ三尺ばかりの四つ目垣ができ上がった。これでようよう安心だと主人は喜んだ。主人は愚物（おろかもの）である。このくらいのことで君子の挙動（ふるまい。様子）の変化するわけがない。

全体人にからかうのは面白いものである。吾輩のような猫ですら、時々は当家の令嬢にからかって遊ぶくらいだから、落雲館の君子が、気の利かない苦沙弥先生にからかうのは至極もっともなところで、これに不平なのは恐らく、からかわれる当人だけであろう。からかうという心理を解剖してみると二つの要素がある。〈第一からかわれる当人が平気ですましていてはならん。第二からかう者が勢力において人数において相手より強くなくてはいかん〉このあいだ主人が動物園から帰って来てしきりに感心して話したことがある。聞いてみると駱駝と小犬の喧嘩を見たのだそうだ。小犬が駱駝の周囲を疾風のごとく廻転して吠え立てると、駱駝は何の気もつかずに、依然

として脊中へ瘤をこしらえて突っ立ったままであるそうだ。いくら吠えても狂っても相手にせんので、しまいには犬も愛想をつかしてやめる、実に駱駝は無神経だと笑っていたが、それがこの場合の適例である。いくらからかうものが上手でも相手が駱駝ときては成立しない。さればといって獅子や虎のように先方が強過ぎてもものにならん。からかいかけるや否や八つ裂きにされてしまう。からかうと歯をむき出して怒る、怒ることは怒るが、こっちをどうすることもできないという安心のある時に愉快は非常に多いものである。なぜこんなことが面白いというとその理由はいろいろある。まずひまつぶしに適している。退屈な時には髯の数さえ勘定してみたくなるものだ。昔獄に投ぜられた囚人の一人は無聊のあまり、房の壁に三角形を重ねて画いてその日をくらしたという話がある。世の中に退屈ほど我慢のできにくいものはない、何か活気を刺激する事件がないと生きているのがつらいものだ。からかうというのもつまりこの刺激を作って遊ぶ一種の娯楽である。ただし多少先方を怒らせるか、じらせるか、弱らせるかしなくては刺激にならんから、昔からからかうという娯楽に耽るものは人の気を知らない馬鹿大名のような退屈の多い者、もしくは自分のなぐさみ以外は考うるに暇なきほど頭の発達が幼稚で、しかも活気の使い道に窮する少年かに限っている。次には自己の優勢なことを実地に証明するものにはもっとも簡便な方

法である。人を殺したり、人を傷つけたり、または人を陥れたりしても自己の優勢なことは証明できるわけであるが、これらはむしろ殺したり、傷つけたり、陥れたりするのが目的のときによるべき手段で、自己の優勢なることはこの手段を遂行した後に必然の結果として起こる現象に過ぎん。だから一方には自分の勢力が示したくって、しかもそんなに人に害を与えたくないという場合には、からかうのが一番お恰好である。多少人を傷つけなければ自己のえらいことは事実の上に証拠だてられない。事実になって出て来ないと、頭のうちで安心していても存外快楽のうすいものである。人間は自己を恃むものである。否恃み難い場合でも恃みたいものである。それだから自己はこれだけ恃める者だ、これなら安心だということを、人に対して実地に応用してみないと気が済まない。しかも理窟のわからない俗物や、あまり自己が恃みになりそうもなくて落ち付きのない者は、あらゆる機会を利用して、この証券を握ろうとする。柔術使いが時々人を投げてみたくなるのと同じことである。柔術の怪しいものは、どうか自分より弱い奴に、ただの一返でいいから出逢ってみたい、素人でもかまわないから抛げてみたいと至極危険な了見を抱いて町内をあるくのもこれがためである。その他にも理由はいろいろあるが、あまり長くなるから略することに致す。聞きたければ鰹節の一折も持って習いにくるがいい、いつでも教えてやる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com